

台湾文化の視点から

歌を規制する眼差し

—台湾ヤミ族の神の歌—

皆川 隆一

【ヤミ族社会概観】

ヤミ族は、ルソン島から台湾へと連なる島々のほぼ最北、正しくは北から二番目の島蘭嶼（ランユ）に居住する、人口2800人ほどの少数民族です。フィリピンと台湾との国境はバシー海峡上にありますから、国境北側に位置するランユは当然台湾領土となります。しかし、そこに住む人々の言語や文化は、国境南側バタン諸島とのつながりが強いようです。

面積約45平方キロのこの小さな島の中に集落が六つあります。島の南側にはイモロッド、イラライ、ヤユの三集落が、北側にはイラライ、イラノミルク、イヴァリヌの三集落があります。集落によって、かなり気質の違いがあるように思います。ヤミ族の伝統的住まいは、台風を避けるために、主屋が地面から2メートルくらい掘り下げられたところに立つ半地下式の家屋となっています。地上には屋根しか見えません（写真①）。しかし、二つの集落を除いて、すでにそうした伝統的家屋は姿を消してしまいました。政府支給のセメント造りの家がそれにとって代わりました。かろうじてイラライ・イヴァリヌの二集落がその伝統的家屋を残しているだけです。とは言え、この二つの集落も、半分はすでにセメント造りの家になっています。しかし、その半分の人達だけでも不便を覚悟で伝統にこだわるということは、それらの人々がある意味で保守的であり、閉鎖的な気質であることの証しであるように思います。私の調査の大部分は我々よそ者に対して開放的なイモロッド村におけるものです。

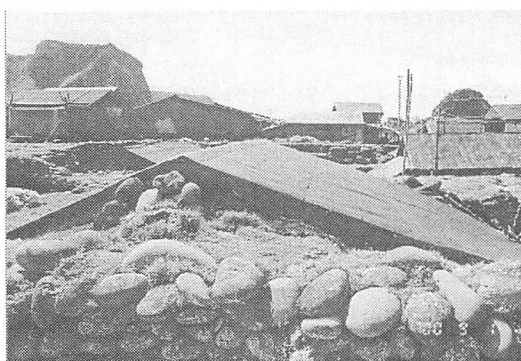


写真 ① （イラライ村の風景）

彼らの生活は、そうした住まいのみならず、また開放的か閉鎖的かにかかわらず、様々な面において急激に変化しています。ヤミ族はもともとタロイモを水田で耕作し、副次的にヤムイモ・サツマイモ・粟を畑で栽培するという生活でした。蛋白源は魚でした。島の周りを海の幸豊かな黒潮の流れが取巻いているのです。トビウオを主として、マグロやシイラも回遊してきます。半農半漁で何とかやっていける環境でした。しかし、若者達によれば、タロイモやヤムイモより、白い米の飯の方が美味しいと言います。塩水で煮炊きただけの伝統料理より、台湾風の濃厚な味付けの方が好みにあうと言います。衣類にしても、年寄り達が伝統的な禪姿であることを恥ずかしいと感じる若者もいます。ジーンズにTシャツ姿が普通になってきました。

しかし、何といても一番大きな変化は、言葉を失いつつあるということでしょう。戦前の日本時代には蕃童教育所で三年間の日本語教育がほどこされていました。戦後は台湾政府による北京語の義務教育が普及しました。そうした中、祖父母と孫との間でコミュニケーションが成り立たなくなっているのです。世界中の少数民族に共通する大問題が、この島でも発現しているのです。

そうした急激な変化にもかかわらず、ヤミ社会には戦前戦後を一貫する一つの大きな文化的社会的特徴と言えるものがあります。台湾本島には八部族の少数民族がいます。(現在の陳政権になって新たに二部族が台湾原住民族として追加認定されましたから、十部族になりますが。) 彼らの社会の多くには頭目という社会的リーダーが存在しています。代々世襲され、その地域における政治的・経済的特権階層の存在です。しかし、ヤミ社会には、そうした特権を連綿と継承する家筋などないのです。政治力や経済力のみならず、宗教的権威の世襲なども見受けられません。単純な言い方をすれば、極めて平等な社会という印象を受けるのです。

しかし、いかに平等な社会とは言え、無競争の社会というわけではありません。平等な、ある意味で似た者同士の社会であるがゆえに、逆に、わずかな差異を激しく競い合うという側面を合わせ持っています。アメリカ・インディアンのポトラッチやニューギニアのビッグマンシステムのように、自分の財産を蕩尽することで、社会的ステータスを手に入れるということが行われています。三年も五年も苦勞してタロイモ水田を開墾し、豚・山羊を殖やしたというのに、たった一晚の船や家の祝い(ヤミ語では、その祝いを、「ミヴァライ」と言います。)で、それらの収穫物や富を全て人々に振舞ってしまうのです。祝いの主催者はそれによって人々の尊敬を勝ち取るのです。それが、島の男達、いや、その家族にとっても人生最大の関心事となっています。一生のうちにそうした祝いを二回開いたのか、三回開いたのか、それとも全く縁が無かったのか、それが人生最重要な関心事なのです。平等を旨とする社会とは言え、ここにおいては、激しい威信競争が繰り広げられる社会なのです。

【ヤミ族の見えざる世界】

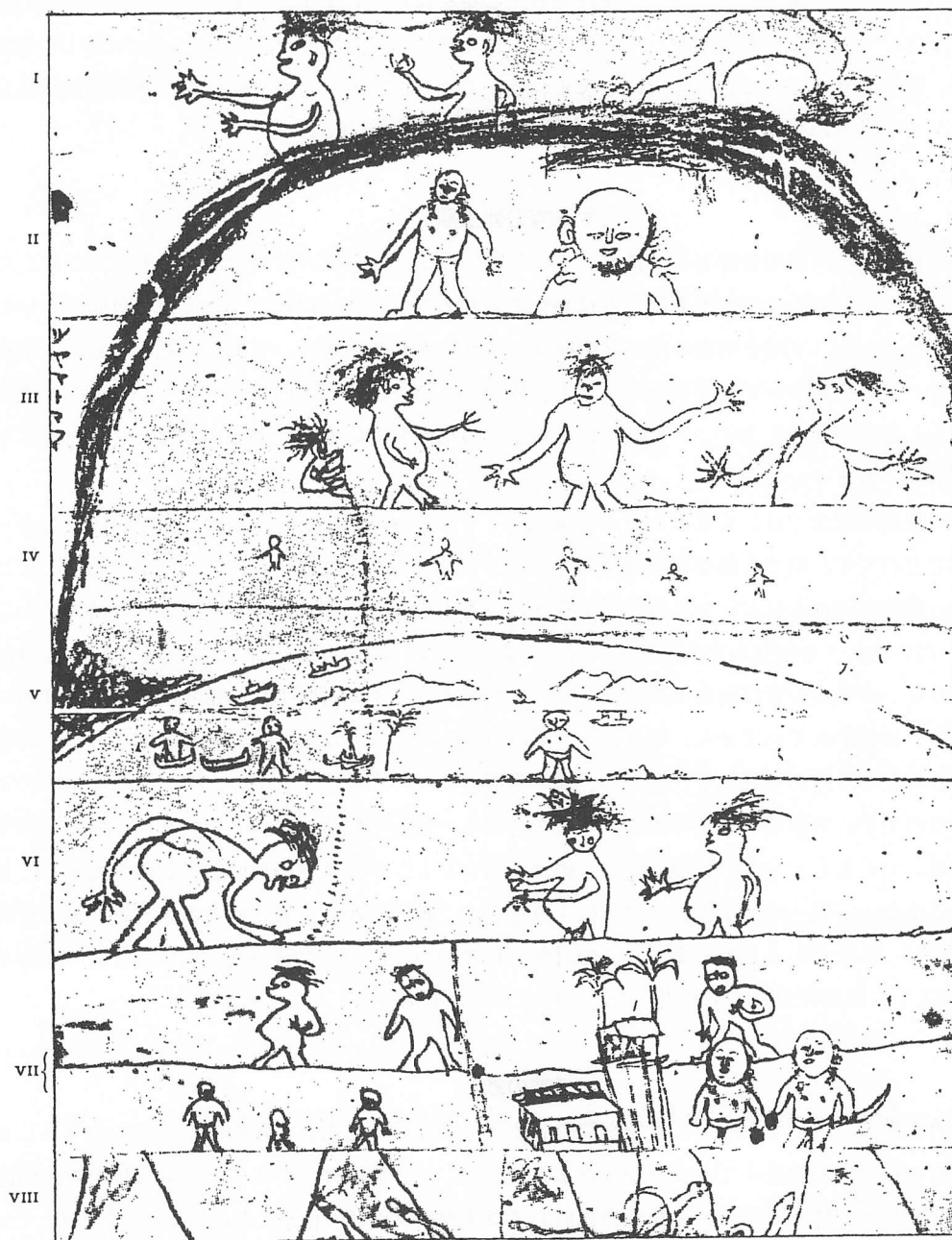
かつて、戦争末期の頃、宣教師のアルンデル・デル・リーがこの島を訪れました。その時、彼は、島人に「あなた達の考えるこの世界はどうなっているのか」と訊ねて、それを絵に描かせました。それが、【図① ヤミ族の世界観】です。【図①】下段の英文は、リー自身が聞き書きした解説です。そこでは、世界がⅠからⅧ層に分けて解説されています。しかし、大雑把に言えば、ヤミ族の伝統的世界観は三層からなると言って間違いではないと思います。リーの分類したⅠ～Ⅳ層は、言わば天界になります。Ⅴ層は人間界、ヤミ族が住む地上世界、Ⅵ層・Ⅶ層は地下世界ということになります。世界は大きくその三層からなります。そして、その三層の世界は、さらに、Ⅷ層の巨大な宇宙樹数本によって支えられていると考えるのが、彼らの伝統的世界観なのです。

地上界は、勿論、生者の世界です。天界は、Ⅱ層の姿が象徴する、言わば、神々(ヤミ語では、タオ・ド・トと呼びます。タオは人、ドは場所の前置詞、トは天の意味です。つまり、天の人、天の存在ということになります。神と訳したのは、実は、不正確です。)の世界です。地下界は、Ⅶ層上段の絵が表す死者・死霊(ヤミ語では、アニトと言います。Ⅵ層の絵も同じです。)の世界です。しかし、注意を要することは、天界・地上界・地下界それぞれがともに、実は、両義的な世界らしいということです。Ⅱ層には、いかにも神と思われる福々しい姿が描かれています。しかし、また、Ⅲ層の天界には、Ⅵ層・Ⅶ層上段の死霊に似て下腹の膨れた蓬髪の姿が描かれています。神の住むⅡ層よりも下位ではありますが、Ⅲ層は、やはり、天界の一部です。そこに、死霊に似た存在が住んでいるのです。また、Ⅶ層は上段と下段二層に分かれています。上段には、Ⅲ層同様死者たちがいかにも餓鬼然として描かれています。一方、下段右側には、Ⅱ層の存在同様福々しい姿が描かれています。タオ・ド・ティラウナムと呼ばれる人たちです。タオ・ドは、タオ・ド・トの時と同じ意味です。ティラウナムは、下という意味です。つまり、下の世界の人ということです。ヤミ族の世界観では、地下世界は、死者が赴くべき暗黒の世界であると同時に、豊饒と平和に満ちた光明なる世界でもあるので

【図① ヤミ族の世界観】

"CREATION MYTHS of THE FORMOSAN NATIVES "

Arundel Del Re



THE YAMI COSMOS FIG. I (Native Drawing)

- I. The Figure on the right is that of the lazy son rolling across the heavens.
- II. Tau-ro-to Gods: Shimo-ra-po and Shimo-mi-ma.
- III. Anito Gods: Shivairai (C), Shipariud (R). Note the wild hair and pot-bellies which characterize the Anitos in this and lower planes.
- IV. Pi-na-lung-ao goddesses.
- V. Yami Plane.

- VI. Yami-Anitos.
- VII. (Upper part): Anito (L), Entrance to human underworld (C), Humans (C), (R).
(Lower part): Yami couple (R) and subterranean house (C), Humans (L). Note the peculiarly round-faced appearance of the Yami, similar to that of 2nd plane gods.
- VIII. Bases of the tree trunks supporting the Yami Cosmos.

す。ヤミ族の伝説に、継母の虐めにもめげず健気に生きた娘の話があります。娘はある晩タオ・ド・トの夢のお告げを受けます。翌朝早く目を覚ますと、お告げにしたがってジムアゴという場所に出かけます。いつもは叢に覆われていたせいか全く気が付かなかったのですが、その朝は、地下世界への入り口がポッカリ口を開けていました。娘は恐る恐る足を踏み入れます。すると、そこには、夢の通りの美しく豊かで平和な世界が広がっていました。地上の世界では継母の言われなき虐めに苦しむ日々でしたが、地下世界では娘は良き伴侶にも恵まれ豊かで幸せな日々を送ります。Ⅶ層下段右側には、そのユートピア世界の福々しい住人が描かれているのです⁽¹⁾。

【ヤミ族の死生観】

天上界・地上界が両義的世界として描かれているということは以上の説明でおわかりいただけたでしょうか。では、生者の住む地上界はどう描かれていたのでしょうか。前項では、実は、Ⅵ層について曖昧にしていました。Ⅴ層とⅥ層の間には明確な一線が引かれています。常識的に見るならば、Ⅴ層は地上世界、Ⅵ層の死者＝アニトの世界は地下世界というふうに、二つの異なる世界が垂直的に表現されていると見るべきでしょう。一見確かにそのように描かれているのですが、実は、必ずしもそう単純には解釈できません。

ヤミ族の伝統的観念では、生者は七つの靈魂を持っています。頭に一つ、両肩・両肘・両膝に各一つ、全部で七つです。中でも頭の靈魂は最も大事で、これが体から遊離すれば、命にかかわることとなります。死後、それらはどうなるのでしょうか。一番大事な頭の靈魂は、東南東の遙か彼方にある「赤い島・白い島」へと旅立ちます。他の一段弱い靈魂はどうなるのか。生者たちの島で、ある者は墓地の辺りを、またある者は奥山深く彷徨っているのだそうです。【図①】の世界観にはその「赤い島・白い島」は描かれていません。描き手が、垂直方向を描くことに重きをおいて、水平方向の世界まで描ききれなかったのでしょうか。しかし、弱い靈魂の死後の姿は描かれています。それがⅥ層のアニトたちなのです。Ⅵ層はランユの奥山・墓地を彷徨う一段弱い死霊＝アニトたちを描いているのです。こう考えてくると、Ⅴ層とⅥ層の間の一線は、必ずしも二つの世界の垂直的異質性を表そうとしているのではなく、同一の水平世界に属しはするものの、越えがたい生者と死者の世界の断絶性を表現したものだのだらうと考えます。この【図①】については、まだ言い残しているところがありますが、注(1)に掲げた拙稿を参照いただければと思います。

【神の歌】

ヤミ族の世界観を説明することに紙数を費やしすぎてしまいました。本題の歌謡の話に入りましょう。高天原の神々は歌を残すことはなかったようですが、ヤミ族の神＝タオ・ド・トは地上の人間同様に歌うことが大変好きです。ヤミ社会の霊能力者ロミヤックが語り伝えてきたところですが、ロミヤックには、神＝タオ・ド・トが憑依する者と、死霊＝アニトの憑依する者とがいます。ある伝説上のロミヤックの話なのですが、そのロミヤックにある時天界のタオ・ド・トが憑依しました。ある時というのは、船の進水式の祝いか新築の家の祝い（先にも触れましたが、ヤミ族にとってはこの祝い事を一生のうちに何回開催できるかが人生最大の関心事です。「ミヴァライ」と言いました。）の時だったと伝えられています。そのロミヤックも祝い事の席に招かれていたのでしょうか。そのロミヤックに突然タオ・ド・トが神懸かってきて歌を歌ったのです。次のような歌です。

- | | | |
|---|---|------------------------|
| ① | ji kamo mapaipamait a anohod a,
not 皆さん 奢り高ぶる 歌う | 地上のタオよ、な奢り歌いそ。 |
| ② | tawo namen do tataragaen am,
人 私達は ~で 天界 | 天界住まう、我らタオ・ド・ト、 |
| ③ | tawo namen do tataragaen am,
人 私達は ~で 天界 | 天界住まう、我らタオ・ド・ト、 |
| ④ | ta adowa o savilak no avang da akay a
二つ 楫 船 天界の主(シ・アカイ) | 天主(シ・アカイ・ド・ト)の船は、楫二本、 |
| ⑤ | lima o malazongazong a oman,
五つ 椰子の木 | 天主の庭に、椰子五本、 |
| ⑥ | lima o malazongazong a oman,
五つ 椰子の木 | 天主の庭に、椰子五本、 |
| ⑦ | omzongo so sesedepan no vahay a,
立っている 入り口 家 | 庭の先には、何が立つ。 |
| ⑧ | omzongo so sesedepan no vahay a,
立っている 入り口 家 | 庭の先には、何が立つ。 |
| ⑨ | ta syam o sinogat da tagakal,
九つ 立っている 涼み屋 | 涼み屋九棟、並び立つ。 |
| ⑩ | ta syam o sinogat da tagakal,
九つ 立っている 涼み屋 | 涼み屋九棟、並び立つ。 |
| ⑪ | pinazowazomsen so kakanen.
屋根に被せる ~を タロイモ | 天の主の、シ・アカイは、涼み屋ごとに宴する。 |

上記②・③行で、ロミヤックに憑依したのは、天の神タオ・ド・トであると素性を明かしています。④から⑧行では、天界の主=シ・アカイ・ド・トは、地上の人間界では見ることのできない楫が二本もついた大きな船(写真②)を持ち、前庭には五本の椰子の木がそびえる広い屋敷に住んでいると歌い、⑨・⑩行では、その広い前庭には、九棟の涼み屋(写真③)が並び立っていると歌っています。④から⑩行目までは、神が自分達は人間どもとは比較にならないほど優越した存在なのだということ

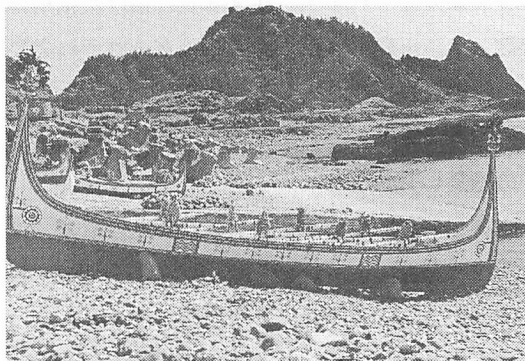


写真 ② (船中の櫂とは別に、船尾に長い楫が一本取り付けられる)

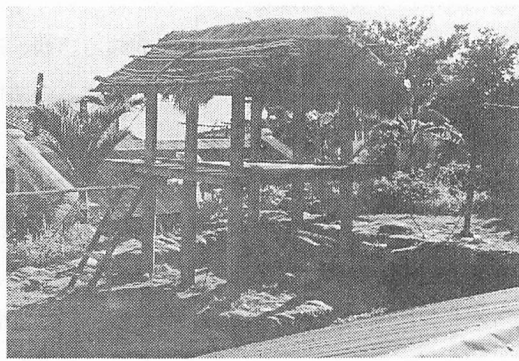


写真 ③ (涼み屋)

を誇っているのです。最終行はその極みです。冒頭でも触れましたように、人間世界では、船や家を造った時にミヴァライという盛大な祝い事が開催されました。しかし、涼み屋(普通、日本人研究者は、涼み台と呼んでいます。)を造った程度では、ミヴァライの宴を開いて大盤振る舞いすることなどは、まず無いのです。人間界では、一生に一度だけでもミヴァライを開くことができれば幸せ者です。それを、天界の主は、母屋の付属物でしかない涼み屋のために、しかも、九棟の涼み屋を建てる

ごとにミヴァライの大散財をするのだと、主宰者シ・アカイ・ド・トは己の力を歌い誇るのです。注意すべきことは、こうした力の誇示は、神だけが許された表現だということです。人間界のミヴァライでは、夜を徹しての歌の掛け合いが主催者と客人たちの間で行われます。そこでは、いかに盛大なミヴァライの祝宴であろうと、けっして自己の財力を誇示したり、あるいは、逆に相手の財力を褒め称える内容の歌を歌い上げてはいけません。

【人の歌】

では、どんな歌がミヴァライの歌会では歌われるのでしょうか。ミヴァライで歌われる歌は、普通、意味内容の上から前段・後段の二部構成で成り立っています。特に、新築のミヴァライの歌会ではそれが厳密に守られています。1985年3月4日イラライ村シャプン・パビヌン家の改築祝いの歌会で主催者が最初に歌った歌を紹介しましょう。すでに紹介した⁽²⁾ことがありますので、歌詞の概略だけ掲げます。遠い祖先から伝承されてきた歌だそうです。前段では、「島が大暴風雨に襲われたことがあった。ある人のタロイモ田は山崩れで埋まり、また、ある人の田は激流に飲み込まれてしまった。暴風雨の去った後、島中が大飢饉に見舞われることとなった。にもかかわらず、私の母方祖先のイモ田だけは何の被害を受けることもなく、飢えることもなかった。他の飢えた人々は、一家伝来の宝物(金の首飾り・青玻璃玉の首飾り、あるいは、湧水田)を持って、私の祖先に食べ物を乞いにやってきた。そうやって、祖先は一財産築いたのである。」と歌っています。裕福だった母方祖先の財産形成の歴史を歌い上げたのです。一方、後段では、父方祖先の歴史を歌います。「私の父方祖先は、タロイモ田も僅かしかなく、ミヴァライを開催する余裕など全くなかった。村中で一番貧しい哀れな人だった。村人達に、役立たずと罵られるのが常だった。」と歌うのです。二部構成とは、単に、前段で母方の歴史、後段で父方の歴史という構成を言うのではなく、前段で一族の富を顕示したかと思うと、後段では一族の悲惨な歴史を自嘲する、この対立構造のことを言うのです。言わば、プラスの内容と、それに相反するマイナスの内容がセットで歌われなければならないのが、人間世界の歌なのです。特に家の歌会では、その構造から逸脱することはタブー犯しとなります⁽³⁾。なぜタブーなのか、なぜ対立構造を読み込まなければならないのかは、いくつかの理由が考えられます。注(3)に掲げた拙稿に詳述しました。簡単に言えば、ヤミ族の言語観、運勢観、アニト観、神観からの説明がそれぞれ必要となります。ここでは、先に掲げた神の歌との関係で、その理由を述べておこうと思います。

【まとめ——神の眼差し】

先のタオ・ド・トの歌の紹介では、①行目の歌詞についての説明をしませんでした。先の歌は、誰かのミヴァライの歌会に出席していた霊能力者が、突然に神懸って歌ったものでした。①行目「地上のタオよ」(原文“kamoo”となっている語の訳ですが、直訳すれば、あなた方となります。)は、そのミヴァライの歌会に参加している者たちみんなということになりますが、特に、そのミヴァライの主催者に呼びかけたものでしょう。そして、「な奢り歌いそ。」と一喝したのです。おそらくそのミヴァライの主催者は、前節のシャプン・パビヌンのごとく、半分は自慢し、半分は貶めるという歌い方をしなかったはずなのです。対立構造の無い歌だったのでしょう。ひたすら一族の繁栄の歴史・成功の歴史を歌い上げていたのだと推測できます。あるいは、自分の財力・能力だったかもしれせん。しかし、富や地位や能力の誇示は神にしか許されない表現でした。だからこそ、我を誇示し一族を誇る彼(あるいは、彼ら)を、神は、ロミヤックの口を借りて一喝したのです。ヤミ族の神は、何よりも、神を忘れる傲慢を厭うのです。ミヴァライの歌会では、プラスとマイナス双方を読み込まね

ばならない理由は、そうした神の眼差しへの慮りがあったからなのです。ヤミ社会にあつては、日常生活でも自己顕示は慎まれるべき規範の一つとなっています。道徳の起源も、歌の作法の出発も、神の眼差しを意識することにあつたのです。

(注1) ヤミ族の世界観については、『アジア民族文化研究3』(2004.3)所収の拙稿「神の歌」を参照願いたい。

(注2) 『声の古代——古層の歌の現場から』(2002.11 武蔵野書院刊)所収の拙稿「死霊の歌」に原語で紹介した。

(注3) 注1・注2のほか、『神の言葉・人の言葉——〈あわい〉の言葉の生態学』(2001.10武蔵野書院刊)所収の拙稿「対立構造と反転表現」に詳述した。

補注：2001年10月、万葉古代学研究所主宰共同研究の第4回研究会で「神の歌・死霊の歌」と題した発表をさせて頂いたことがある。本稿は、その時の記録テープを研究所のご好意で文字起こして頂いたものに基づいている。しかし、紙数の関係で、「神の歌」に関する部分だけを抜き出して加筆訂正した。論旨が尻切れになったことをお詫びする。